

書評

マイク・ポンペオ回顧録

島田 洋一（福井県立大学名誉教授）

今回は、米トランプ政権でCIA長官次いで国務長官を務めたマイク・ポンペオの回顧録『一步も引かず』を取り上げたい（Mike Pompeo, *Never Give an Inch: Fighting for the America I Love*, 2023）。

ポンペオは1963年生まれ。陸軍士官学校（ウェストポイント）を首席で卒業後、5年間、軍務に就いた。冷戦期の東西ドイツ国境での戦車偵察部隊長などを務めている。

その間常に、「アメリカが自由を失えば、どこにも逃げる場所はない。我々は最後の砦だ」というロナルド・レーガン大統領の言葉を、肝に銘じていたという。

退役後、ハーバード・ロースクール（法科大学院）に入学、修了し、弁護士として活動したのち、士官学校の同級生らと共に航空機関連ビジネスを立ち上げ、企業経営の現場も経験した。

2010年、地元カンザス州から連邦下院議員に当選。特に情報委員会の活動的メンバーとして、CIAなど情報機関との関係強化に意を尽くした。この間、オバマ政権が進めた宥和的なイラン核合意を徹底批判する論陣を張り、頻繁なマスメディア登場を通じて、一般に知られる存在となった。

2017年1月、トランプ政権発足と同時にCIA長官に抜擢された。2018年4月、国務長官に転じ、トランプ政権が任期を終える2021年1月まで務めた。

2024年大統領選挙には出馬を断念したが、将来的に、イタリア系初のアメリカ大統領となり得る人物と目されている。

トランプ政権末期に至って、中国共産党政権（以下中共）を「人類の敵」と見なす立場を鮮明にし、国務長官退任後は、台湾を独立国家として承認すべきことを主張している。

本書冒頭でも、習近平と中共について、「歴史上、これほど危険な巨人が世界にまたがったことはまずない」と述べている。

そして、トランプ政権の「最も重要な使命」として、「中国との関係で、何としても必要な、一世代は掛かる転換をリードしたこと」を挙げている。

北朝鮮に関してポンペオは、ツアー旅行で入境したオットー・ウォームビア青年を北が無実の罪で拘束し、拷問死させただけでなく、彼に要した「医療費」の支払いを米側に要求してきた事実を特筆し、いかに唾棄すべき存在かを強調している。

米朝首脳会談を巡る動きについては、紙幅の関係もあり、稿を改めて論じたい。

本書のタイトル「一步も引かず」に通ずる態度を、ポンペオは、特にクラレンス・トーマス最高裁判事（1948年生、現職）から学んだという。

黒人で保守派のトーマスは1990年、ブッシュ父大統領によって最高裁判事に指名されたが、上院の承認公聴会で、部下へのセクハラ等の根拠薄弱な攻撃に4か月近くも晒された。結局耐え抜き、52対48の僅差で承認を得る。

執拗な糾弾が頂点に達し、精神的に追い込まれたであろう時期、トーマスは次の言葉を発した。

「身を引くくらいなら死んだ方がましだ。私はおびえはしない。かつて一度もいじめ屋から逃げたことはない」

自身、厳しい状況に直面するたびに、ポンペオはこのトーマスの発言を想起し、勇気を得たという。

ちなみに、民主党の上院議員たちがトーマスへのローブローを繰り返した司法委員会を委員長として仕切ったのは、現大統領ジョー・バイデンだった。米保守派のバイデンに対する侮蔑感は長い経緯があり、根が深い。

本書は生き生きとした人物評を魅力の一つとしている。いくつか挙げておこう。

まず中共の習近平についてポンペオは、時に冗談も言うプーチンと違い、常に陰気で、目に人間味が欠くという。旧東ドイツやソ連の党官僚に似たタイプで、世界のリーダー中、会っていて最も気分の良くない人物の一人だったとも述懐する。よく分かる評である。

ロシアのプーチンによるウクライナ侵略については次のように、むしろバイデンの責任に重きを置く書き方をしている。

「プーチンは冷酷で身勝手な大ロシア主義者だ。その点、昔から何も変わっていない。変わったのは彼のリスク計算である。アフガニスタンから最も恥ずべき形で潰走した弱いバイデンの間が侵略の好機と考えた」

実際プーチンは、オバマ時代にクリミア併合、バイデン時代に全面侵攻とウクライナ領土の切り取りに出たが、その間のトランプ時代には、兵を動かさなかった。

ポンペオによると、同盟国の首脳のうち、最もトランプの逆鱗に触れたのは、フランスのマクロン大統領だったという。マクロンはトランプに対し、イランへの制裁をやめてオバマ流の宥和政策に戻るよう、手を変え品を変え、繰り返し執拗に働きかけてきた。

最後にはトランプが堪忍袋の緒を切らし、二度と掛けてくるなどマクロンからの電話を叩き切ったという。

マクロンの度重なる対中宥和発言も、イランや中国での商機拡大をあからさまに求める彼の政治的傾向から来る、骨がらみのもと見るべきだろう。

安倍晋三首相についてポンペオはこう書いている。

「何度でも言うに値するが、この類まれなリーダーの暗殺は、世界にとって何たる喪失だったか」

最後にポンペオの国務省評を引いておこう。

「国務省は組合主導の、戦闘的なまでに消極的な、構造的情報漏洩マシンである」

以上、ほんの一端しか紹介できなかったが、本書は嵐のようなトランプ外交を一貫して脇で支えた政治家の貴重な証言集である。機会があれば、また別の角度から取り上げたい。